

達成度（評価）	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

学校名	佐賀市立小中一貫校北山校
-----	--------------

1 前年度 評価結果の概要	・校内研究の柱に「対話的な学び」を位置づけ取り組んだことで、児童生徒が主体的に学ぶ姿に加え、考えを交流したり、更新したりする姿が見られた。さらに、論理的思考の手がかりとしている北山思考スキルを活用する等して児童生徒が探求し続ける姿を目指していく。 ・地域との交流活動や地域の特性を生かした体験活動を通して北山のよさを理解し、ふるさとへの愛や誇りを持つ児童生徒を育成する。それら北山のよさを活かした総合的な学習やキャリア教育を仕組むことで、児童生徒にこれからの時代を生き抜く資質・能力をつけさせるようにする。 ・思いやりを持ち、人との絆を大切にすることの育成を目指し、言葉遣いを引き続き指導強化していく。 ・業務のスムーズ化、重点化を促進し業務改善を行うことで教育の質の向上を目指す。
---------------	--

2 学校教育目標	「感謝・絆・全力」を合言葉に、小中一貫教育と各種交流活動によって、自主・自立に向かう児童生徒の育成をめざす。
----------	--

3 本年度の重点目標	①「感謝」― 豊かな心【キーワード： 自他の生命尊重 他人を思いやる心 自己肯定感 キャリア教育】 ②「絆」― 絆づくり【キーワード： 人間関係力の向上 ふるさとへの愛、誇り 地域連携 小中一貫教育】 ③「全力」― 学力向上【キーワード： 基礎・基本(学習・生活習慣)定着 思考力・判断力・表現力向上 体力向上】
------------	--

4 重点取組内容・成果指標	5 最終評価
---------------	--------

(1)共通評価項目		重点取組		最終評価		学校関係者評価		
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	実施結果		評価	意見や提言
					達成度 (評価)	実施結果		
●学力の向上	○全職員による共通理解と共通実践・学習内容の定着に向けた分かりやすい授業の実践	○学校評価アンケートにおいて、「学習課題や学習過程の工夫をした授業づくりをし、主体的に学ぶ姿を目指している。」の項目で、肯定的な回答をする教職員の割合が90%以上になるようにする。 ○県学習状況調査の各学年、各教科の平均点数が県平均を超える。	・「北山校授業モデル」(つかむー見通すー考えるー深めるーまとめる)を徹底し、北山思考スキルを活用した対話活動を通し、主体的に学ぶ授業づくりを全職員で展開し、論理的思考力の高まりを目指す。	A	・12月学校評価アンケート【教職員】では、目標とする項目において、肯定的な回答の割合が90%以上となった。また、児童生徒、保護者共に、ほとんどの項目で前回調査より肯定的な回答の割合が増加し、90%以上となった。対話活動を通し、主体的に学ぶ授業づくりは全職員で展開ができており、さらなる学力向上に向け、共通実践の徹底を図り取り組んでいきたい。		A	・引き続き、小中一貫校、小規模校のよさを生かして学力向上を図ってほしい。
	○児童生徒が、課題解決に向けて、対話的な活動を経て、主体的に学ぶような授業実践 ○学習用タブレットを効果的に活用した学習の設計 ○家庭学習に関する児童生徒、家庭への啓蒙	○学校評価アンケートで、「全教科等で、課題解決に向けて児童生徒が主体的に学ぶような学習活動を取り入れた授業実践をした」と回答する教職員を80%以上にする。 ○学校評価アンケートで、「わからないことや疑問に思ったことを自分で調べたり、聞いたりして粘り強く解決しようとした」と回答する児童生徒を80%以上にする。 ○学校評価アンケートで、「電子黒板やパソコンを使った学び方は、分かりやすく、便利だ」と回答する児童生徒を90%以上にする。	・校内研では、全職員で深い学びにつながる効果的な学習活動を取り入れた授業改善を目指す。また言の葉タイム、読書の充実を通して、児童生徒の読解力、論理的思考力を伸ばす。 ・中学生には、ノルティスコラライトを取り入れ、学習内容や時間、方法を含め自分の生活をコントロール(セルフマネジメント)させる。 ・自分の学習について振り返らせたり、家庭学習ががんばろう週間を設定したりして、主体的な家庭学習につなげる。 ・学習用タブレットの活用状況を把握し、必要な研修について計画する。	・12月学校評価アンケート【教職員】では、「学習課題や学習過程の工夫をした授業づくりをし、主体的に学ぶ姿を目指している」の回答が94.4%に及んだ。児童生徒アンケートでも、「課題解決に向けて分からないことは、友達と交流するなど自分なりに解決の方法を考えて取り組んだ」と96.8%が答えており、主体的に授業に取り組んだ。家庭学習においては、小学部は「家勤がんばろう週間」に学年に応じて、学習時間や学習内容を考え、保護者と連携を図り取り組んだ。中学部は、取組に個人差があると考えられたので、学級友会で家庭学習の大切さについて話し、保護者への啓蒙を行った。 ・12月学校評価アンケート【児童生徒】では、「電子黒板やパソコンを使った学び方は、分かりやすく、便利だ」と回答が98.4%であった。職員間でICT機器の実践について共有され、電子黒板やパソコンを使った授業を全学年でほぼ毎日実施しているからだと考える。今後も操作のスキルアップの研修は、随時行っていきたい。	A			B
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○いじめのいちを考える日に、集会活動や学級活動を行う。 ○学校評価アンケートで「自分や周りの人の命を大切に、優しい心で言葉をかけたり、行動したりしている」と回答する児童生徒の割合を90%以上にする。	・道徳の授業を公開することにより、家庭や地域の方々に学校の取組を知ってもらうと共に、心の教育においても家庭、地域との連携を図る。	A	・学校評価アンケートでは、「命の大切さ」や「優しい心での言葉かけ」等に肯定的な回答が90%以上であり、12月の調査では児童、保護者共に肯定的な回答の割合が増えた。 ・いじめのいちを考える日の毎月の取組によりその意識が高まった。それにより、友だち間のトラブルがあった時の教師の対応が早く、チームで動くことが増え、児童生徒も素直に聞き入れるなどトラブルを早期に解決することが増えた。		B	自他の命、他者への思いやり等については特に重点的に指導してほしい。
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○学校評価アンケートで、「友だちがいやがる言葉や言ったり、いやがることはしていない」と回答する児童生徒の割合を90%以上にする。	・月に1回、いじめのいちを考える日として、人権集会を行う。 ・いじめアンケートを毎月行い、日常の細かな観察と併せ、早期発見、早期対応を行う。 ・職員の報告連絡相談を円滑にし、「いじめ未解決0」を北山校のスタンダードとする。	A	・12月学校評価アンケート【児童生徒】では、「友だちがいやがる言葉や言ったり、いやがることはしていない」の肯定的な回答は98.4%であった。9月の結果よりもよくなったのは、月の生活集会をはじめ、授業や行事の中で生徒指導、学級経営にあたってきたこと、トラブルに複数職員で迅速に対応し、事後指導まで徹底して行ったことにも効果があったと考えられる。今後も、予防的生徒指導を重点的にを行い、安心して過ごせるようにしていく。		B	・いじめについては、定義や指導等について家庭と共通理解を図りながら対応していくことが重要である。
	●○児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒の割合を90%以上にする。 ●「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒の割合を80%以上にする。	・学習や行事を通し、児童生徒が見通しをもって取り組み、自分の変化や成長を実感できる単元を仕組む。 ・キャリアパスポートを活用し、各種体験活動では、児童生徒に自分の生き方・目標を見据えた活動の見通しと学びの振り返りを行う活動を仕組む。	A	・12月学校評価アンケート【児童生徒】では、「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒は、80.6%であった。各種体験活動で、児童生徒に自分の生き方・目標を見据えた活動の見通しと学びの振り返りを行う活動を仕組んだりしていた。		B	・将来の夢に関しては、9月より12月にかけて児童生徒の自己評価が下がっている。将来に希望ももてるような取組が望まれる。
	○「あいさつ・返事」「正しい言葉遣い」ができる児童生徒の育成	○「あいさつ、返事、正しい言葉遣い」ができる児童生徒・保護者・教職員の割合を90%以上にする。	・「あいさつ、返事、言葉遣い」についての指導を、年度初めに全校集会、学級指導、児童生徒会活動を通して徹底する。また、年間を通して全職員で指導の徹底を図り、集会等の折に中間評価を加える。	B	・12月学校評価アンケートでは、「あいさつ、返事、正しい言葉遣い」について肯定的な回答が児童生徒93.5%、保護者74.4%、教職員100%であった。保護者の結果が90%を超えていないのは、家庭や学校行事でのあいさつが十分に達成できていなかったからだと考えられる。「あいさつ、返事、言葉遣い」についての指導が、学校外にも生かすように徹底していく必要がある。		B	・児童生徒が自分から積極的に挨拶ができるように引き続き指導をお願いしたい。
●健康・体づくり	●望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	●「健康に良い食事をしている」児童生徒の割合を90%以上にする。 ○児童生徒の交通事故0(ゼロ)にする。 ○学校評価アンケートで、「日常の教育活動、教科等の内容、避難訓練を通して安全に関する指導を継続して行っている」と回答する教職員の割合を90%以上にする。	・食に関する意識調査を実施する。 ・危機管理マニュアルの内容を4～5月中に全職員で確認する。日頃から事例等を示し、児童生徒にも当事者意識を持たせる。 ・児童生徒に年3回の避難訓練の意義の理解を図り、自分で考えて行動し、安全を確保できる資質能力を育むようにする。 ・児童生徒全員がヘルメットをかぶるように指導を徹底する。	B	・12月学校評価アンケート【教職員】では、「安全に関する指導を継続して行っている」の回答のうち、肯定的なものが100%であった。また、児童生徒の意識調査は90%超が、保護者の意識調査では100%が肯定的な回答をしている。しかし、幸い大きな事故や怪我には至っていないが、プランコから落ちてけがをする事案が1件あり、遊具等の利用について改めて指導した。今後も安全に対する意識高揚に向けて、継続した取り組みを行っていく必要がある。 ・児童は、集団登校の際にも安全には気をつけているが、通学路の交通量にまで意識が及ばないことがあるので、機会を見つめて注意喚起をすることがある。		B	・地域との連携や情報共有を密に行い、児童生徒の命を守る学校づくりを期待している。
	○自ら健康的な体づくりをしようとする児童生徒の育成	○「体育の授業や外遊びなどで体を動かし、健康な体づくりを心がけています」と回答する児童生徒の割合を90%以上にする。	・外遊びや日常的な運動を奨励するとともに、部活動(中学部)の時間を充実させる。異年齢集団での交流活動の中に「健康づくり」「体力増進」を目的としたものを組み入れる。	A	・体育授業の始まる前からランニング、腕立て伏せ、背筋、ジャンプスクワットを取り入れ、個人や発達段階に応じて強度を決めて、1年間やり遂げた。また、種目の特性を踏まえて、技術の習得や調整力の向上に努め、球技、水泳、陸上、器械運動などの技能の向上が顕著であった。来年度の体力テストの向上が期待される。主体的に休み時間などに縄跳びに挑戦する児童も多く、体育の授業への関心・意欲も高まっている。		B	・家庭との連携を常に心がけ、児童生徒の健康を守り、体力向上を目指してほしい。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ・月ごとの超過勤務平均時間を毎月35時間以下にする。	・水曜日の定時退勤日を設定・徹底する。 ・原則として課業日1日と週休日1日の部活動休業日を徹底する。 ・会議時間の短縮と目的の明確化。週に1回、集中して業務に没頭する時間帯の設定。 ・困難な事案は複数で連携して取り組むことで個への負担軽減を図る。	B	・学校評価アンケート【教職員】では、時間外勤務45時間以内を意識し、働き方改革推進に積極的に参画しているという職員の割合が上昇(33%→56%)しており、自身の勤務時間に対する意識が向上していると言える。1月31日現在の平均超過勤務時間は、29時間程度だが、個人差は大きい。 ・定時退勤日の徹底ができなかった。水曜日の会議時間の設定を改善する必要がある。		B	・働き方改革は難しい面もあると思うが行事の精選等が望まれる。

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目		重点取組		最終評価		学校関係者評価		
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	実施結果		評価	意見や提言
					達成度 (評価)	実施結果		
○地域との連携	○地域連携活動を推進 ○ふるさとへの愛や誇りを持ち、ふるさとを自慢できる児童生徒の育成	○「北山ふれあい企画」の行事について肯定的な回答をした児童生徒の割合を90%以上にする。 ○学校アンケートで「地域での行事などに進んで参加したり、交流学習で進んで交流したとする」児童生徒の割合を90%以上にする。	・「サマーキャンプ」「冬の北山まつり」の開催に当たっては児童生徒も運営の一員と位置づけ、活動させることで、より参加者全員が充実感を味わえる企画とする。	A	12月学校評価アンケート【保護者】で「学校は、地域連携活動を推進し、行事等を通して、子どもたちの「ふるさと北山」を大切にする気持ちを育成している」との肯定的な回答が94.8%だった。		A	・次年度は、世帯数・教職員数減少が想定されるので活動内容等の見直しが必要である。
○小中一貫教育	○小中一貫教育を推進し、9年間を見通した教育課程の編成 ○小中連携した取り組みによる、特別支援教育の充実	○「小中一貫教育のよさを実感する」について肯定的な回答をする保護者、教職員の割合を90%以上にする。 ○学校評価アンケートで職員間で連携し、指導に当たることができたとする職員の割合を90%以上にする。	・小中一貫教育のねらいやよさを再確認し、活動や行事毎に「めあて」「身に付いた力の振り返り」を取り入れることで、児童生徒にもそのよさを理解させる。 ・子ども支援会議、サポート部会、ケース会議の場で効果的に情報共有をし、児童生徒の指導に当たる。	A	・9年間の学びの連続性、系統性を生かし「小中一貫教育のよさを実感する」について、肯定的な回答をした保護者、教職員の割合が、中間評価と同様に90%以上という結果になった。小中一貫教育の効果が定着していると思われる。今後も、合同な行事等の取組に明確なねらいをもたせるとともに、小中一貫教育の強みを高めていきたい。 ・12月学校評価アンケート【教職員】で「職員間で連携し、個に応じた指導を行うことができた」について肯定的な回答をした職員の割合が90%以上という結果であった。サポート部会や子ども支援会議で情報共有し子ども支援にあたる体制ができつつある。今後も校内支援体制づくりに努め、個に応じた支援の充実を図りたい。		A	・アンケートからも小中一貫教育のよさについては、保護者、教職員とも感じていることが分かる。

●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育	
5 総合評価・次年度への展望	・小中一貫校として、自主・自立に向かう児童生徒の育成やさらなる学力向上の実現を目指し、具体的方策を全職員で共通理解・共通実践していく。 ・あいさつや言葉づかいについては、児童生徒と保護者、教職員の成果の隔りがある。引き続き取り組みを継続することで、改善を図っていく。 ・地域のよさを生かした学習や交流活動を通して、ふるさとへの愛や誇りをもつ児童生徒を育成する。また、そのことをキャリア教育へとつなげていく。